# Ⅷ　陸奥横浜町地先へ移殖された北海道産ホタテガイ稚貝の成育状況について

菅野　溥記・赤星　静雄・青山　宝蔵

## は　じ　め　に

横浜町漁業協同組合では、第１図のA、B、Cに昭和４４年産稚貝の移殖放流を行なった。Aには４４年１１月に４００万個（北海道産稚貝）、Bには４５年３月に３０万個（北海道産稚貝）、Cには４４年１１月に２３０万個（このうち６０万個は北海道産稚貝で残りの１７０万個は地元で採苗したもの）が放流された。

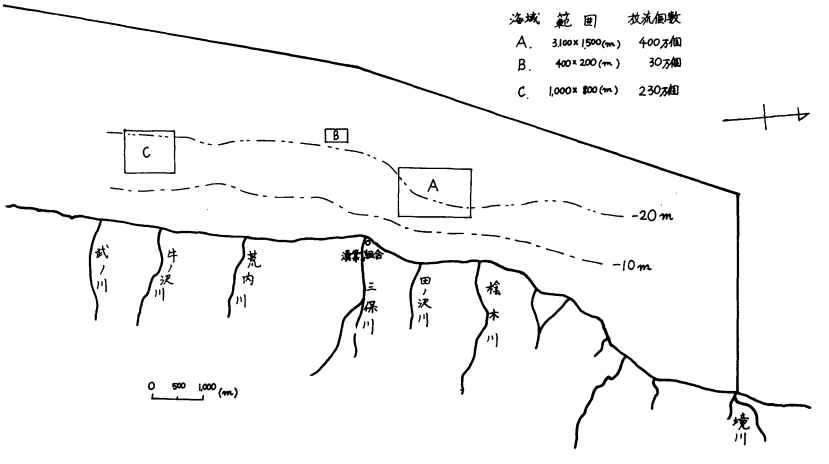
Bに放流された３０万個は従来のホタテガイ漁場より深い水深２０～２５mに放流された。

今回、横浜漁業協同組合からこれらのホタテガイの成育状況を調査してもらいたいとの依頼を受け本調査を実施した。

## 調　査　方　法

- 調産期日；昭和４５年９月１１日
- 調査場所；第１図のB地域
- 調査事項；

潜水により底質の観察、ホタテガイの生息密度を調査するとともにホタテガイを採捕して殻長、重量、移殖時の殻長を測定した。




第1図　ホタテガイ放流海域と放流個体

## 調　査　結　果

(1) 底　　質

底質は小砂利場でこの中に砂泥分がかなり含まれていた。ここで採捕された高令貝は貝殻が厚く、砂利場、岩場に生息しているホタテガイの特徴を示していた。

(2) 生息密度

５回の観察による１㎡当りのホタテガイ生貝（死貝）数は各々 3(0)、9(5)、7(2)、6(0)、8(4)個であり、放流密度は３～１４個とかなりのばらつきを示し、部分的には高密度であった。

放流面積８0.000㎡に３０万個を放流したので、平均放流密度は3.8個／㎡となるがじっさいにはこれより多かった。

(3) 生　存　率

生存率は６4.3～１００％で平均７５％であった。３月から９月までの６カ月間の生存率としては高い値ではなかった。生息密度の高い場所が生存率は低かった。

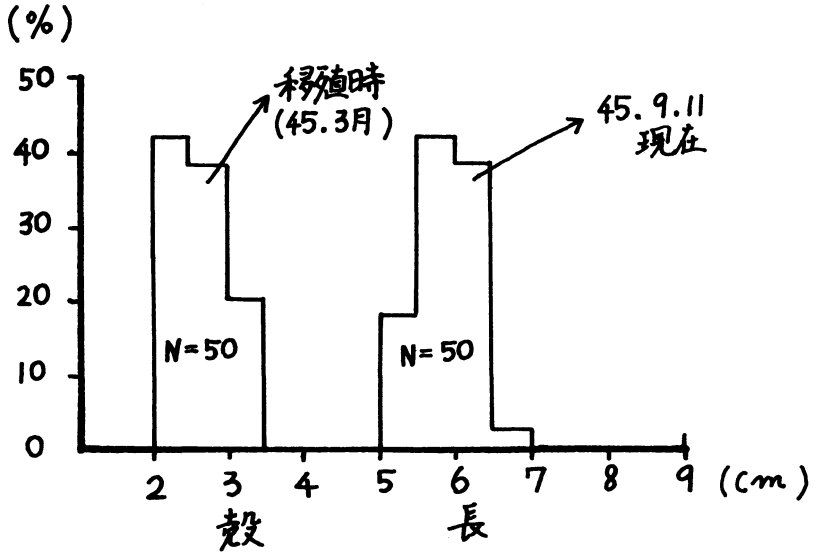
(4) 成長状況

放流時の殻長組成は第２図に示したが、殻長2.5～4.0㎝の範囲であり、2.5～3.5㎝が全体の８０％をしめていた。その後６カ月間に第2図のように成長し、殻長5.0～7.0㎝および5.5～6.5㎝が８０％をしめた。この間の増殻長はほぼ2.5～3.0㎝であり、１カ月当りになおすと0.4～0.5㎝となりごく普通の成長を示した。

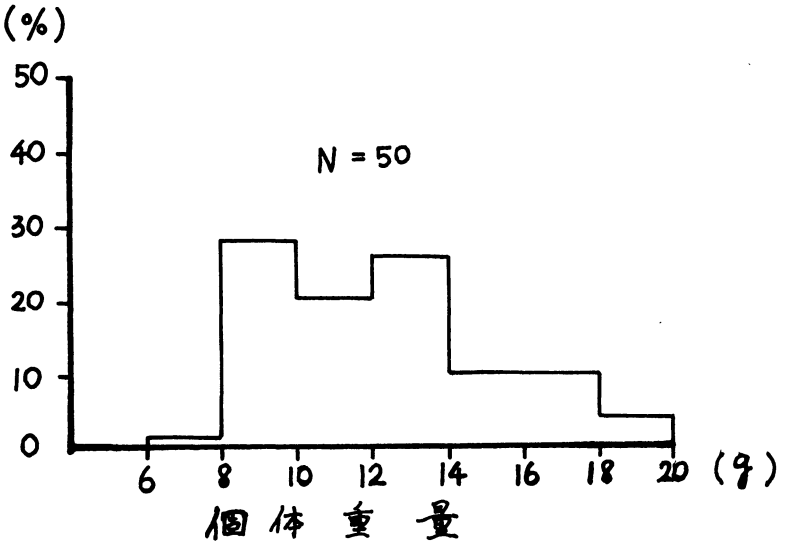
個体重量組成を第3図に示した。6～２０ｇおよび8～１４ｇの間に７４％が含まれた。

(5) その他の生物

潜水観察の結果ヒトデ類は多く見られなかった。




第2図　殻　長　組　成




第３図　重量組成

考　　察

水深２０ｍを越えるＢ域においてもホタテガイは順調な成長が認められた。生息密度が計算値よりも高かったのは観察場所がＢ域の中央部であったためであろう。生存率は生息密度が高い所ほど悪い結果を示したので、この地先ではもう少し低密度に放流すべきと思われる。